

【事業実績】

京都国立近代美術館を中核として、地域の大学、盲学校、視覚障害者と協働しながら、視覚以外の感覚を用いる新しい美術鑑賞プログラムの構築とその成果発信のため、主に以下の取組みを行った。

※事業ウェブサイト：<https://www.momak.go.jp/senses/>

1. 視覚以外の感覚を用いた美術鑑賞の実践と発信

◆「さわる」鑑賞プログラムの継続的な実施

本物の立体作品や美術館建築を手で触れたり、音を聞いたりして経験するワークショップや、ユニバーサルな美術鑑賞の意義について考えるトークイベントなど、合計8つのプログラムを実施し、合計で370名を超える参加があった。いずれも障害の有無を超えて参加できることを心がけ、既存の方法に捉われない新しい作品鑑賞のあり方や、共生社会に向けた実践について、実践しながら共に考える場とすることができた。

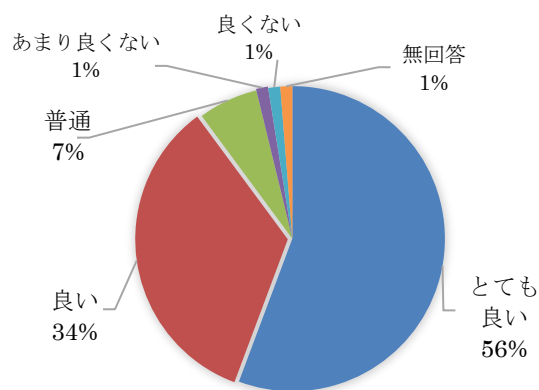
イベント名	実施日	参加者
美術館ってどんな音 つくって鳴らそう建築楽器	8/20、8/21	47名（視覚障害者7名）
岡田利規、《The Fiction Over the Curtains》について語る	9/23	30名
ワークショップ「記憶の空間を旅しよう」＊	2020/2/7、2/8	34名（視覚障害者4名）
トークセッション「点字でチラシをつくるとは」＊	2/7	39名
「手だけが知ってる美術館 ニーノ・カルーソの陶芸」＊	2/8	20名（視覚障害者3名）
齋藤名穂講演会「五感と記憶がつくる建築・空間」＊	2/8	39名
トーク&ワークショップ「音のズームレンズ Antenna（アンテナ）を使って岡崎まちあるき！」＊	2/9	34名（視覚障害者6名、聴覚障害者5名）
萌えいずる声 百瀬文《聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと》上映・シンポジウム＊	2/9	123名（視覚障害者若干名、聴覚障害者13名）

＊については、京都国立近代美術館オープンデー2020「ひらきまつり！」（2/7～9）の一環として実施した。

<主な感想>

- ・ 建物の中にいろいろな素材があることを知った。目で見て知ったつもりでも音をきいてそのあと目で見たときに「高い音」「ひんやりした音」など、楽器を作ってまた感じ方が変化しました。きく、みる、さわる、考えるがすべて変化につながりました。
- ・ 思い出のある品物を見ただけでは想像もできなかった“家”にまつわる物語をそれぞれの参加者の皆さんからお聴きするのが楽しかったです。視力に障害のある方から「なぜ、このカップを見て“重そう”と思うのですか？」と問いかけられ、視覚と経験が無意識に結びついていたことに気づきました。
- ・ カルーソの作品をさわって鑑賞するのと、見て鑑賞するのでは印象が違った。見て鑑賞した時は少々形が違うものの同じ雰囲気だろうと思ったが、さわって鑑賞した時は作品各々に個性があって、全く別のものかと思うくらい違いがあった。

アンケート回答



◆盲学校との連携による鑑賞教育の充実のための授業

連携先	実施日	対象者
筑波大学附属視覚特別支援学校	5/13	中学部 12 名 （点字使用 6 名、弱視 6 名）
京都府立盲学校	12/14 (12/5 と 12/9 に事前授業を実施)	中学部 11 名 （A グループ（重複障害）5 名 ／B グループ（単一障害）6 名）

5 月に筑波大学附属視覚特別支援学校からの来館を受け入れ、京都国立近代美術館およびロームシアター京都にて建築を五感で味わった後、建築の素材を用いた楽器作りを行うプログラムを実施した。

<主な感想>

- ・ コンクリートやガラスまたは高い場所と叩くところを変えることで音の違いや響きの違いがとても分かりやすく伝わってきました。どこかの冒険をしているかのようでとても楽しかったです。
- ・ 一番印象に残った発見は、同じ素材でも中身が空洞かなどによって音にかなりの違いがあることです。音によって素材の状態が確認できるのではないかと思います。僕は技術に興味があるので、この体験で知識を深めることができました。

12 月には京都府立盲学校中学部と連携して、美術館にて、所蔵作品の鑑賞・制作、そして作品梱包について体験する授業を行った。美術館という非日常的な空間を体験することや、形や大きさ、手触りがさまざまな作品を触って自由に想像を膨らませる活動は新鮮だったようで、のびのびと活動を楽しむ様子が見られた。

<主な感想>

- ・ 包まれて手に汗をかいた。帽子がけをひっくり返して被ったのが面白かった。
- ・ 事前で触っていたベアテ・クーンの作品は実際に触った時どんなのかなと思ったけど、予想より複雑な印象を受けた。



◆見えない人とつくる「感覚をひらく」鑑賞プログラム

京都国立近代美術館の所蔵作品を、触覚、聴覚、嗅覚を用いて、また想像力を働かせながら鑑賞を深めるためのプログラム（ワークショップ・ツール）の開発を目指し、視覚障害のある方、アーティスト、さまざまな分野の専門家など、異なる経験や知識を持つ人たちとワーキングチームを形成した。今年度事業では事例調査やワークショップの試験的な実施を行い、本格的なプログラム構築は来年度以降、順次進めていく。

◆視覚障害者の鑑賞支援のための触察ツール制作

視覚障害のある方と美術の世界をつなぐツールとして、3 点の所蔵作品（木版画、リトグラフ、陶芸）について、形や特徴を触って学ぶ触察シート「さわるコレクション」を各 1,000 部、合計 3,000 部発行した。

制作にあたって地域の視覚障害者の協力を仰ぎ、作品選びから文章や図の制作まで全工程にわたって共に検討を進めた。完成後は全国の盲学校・ライトハウス、点字図書館など約 200 か所へ送付したほか、引き続き館内での配布、希望者への郵送にも対応する。

